

「タイヨウのうた」を読んで

電子制御工学科 3年 曾根 裕貴

「タイヨウのうた」は、主人公の雨音薫が XP という難病をかかえ、わずか十六歳で死ぬまでの物語である。XP とは、太陽に当たると、一般の人の何倍も皮膚ガンになりやすく、今はまだ、決定的な治療法もなく、進行を遅らせるためには、紫外線をさけて生活するしかない難病である。しかも、その病気は、それほど長くは生きられないというものであった。僕は、この本を読んで、初めて、XP という病気があることを知り、そして、この世に、太陽に当たれない人がいるということに驚いた。

僕は、どうして皆平等に産まれてこないのか不思議に思う。大半の人々は、何も異常のない元気な赤ちゃんとして産まれてくるが、一方では、「五体不満足」のように何かしらハンディをかかえて産まれてくる人々も少なくない。しかし、ハンディを背負って産まれてきた人々は、何事にも一生懸命で、まるでハンディなどかかえていないかのように、毎日を過ごしている。その姿は、ハンディのない人々が感心するほどである。雨音薫も、XP というハンディをかかえながら、音楽を聴きに来てくれる人々を魅了するストリートミュージシャンであった。薫は、毎日、夜になると、駅近くの路上で歌い、その歌声は、聴く人々を癒したと書いていた。薫にとって、歌うことが生きがいであり、何よりも親孝行になると思ったのだと思う。僕は、ハンディをかかえた人ほどかっこよく、輝いていると思う。

よく、テレビで、ドキュメンタリーや実話をもとにしたドラマなどが、報じられているが、皆いきいきとしている。余命何ヶ月で、もしかしたら、明日死ぬかもしれないという人が、一日一日を生き抜き、その後、何年も生き延びたという話を何回か聞いたことがある。そんな人々の生きようとする力は、何ものにも変えられない治療法となり、それは、真の生命力と呼ぶにふさわしいものであると思う。命の可能性とは、すばらしく、時には、医学をもくつがえすことがあるのだと思う。また、医師や家族の支えや、あきらめない強い愛が、生きようとする力の源となるのだと思う。まさに、人は人に支えられて生きているのである。

最近、自ら死を選ぶ人がたくさんいたり、意味もなく人が殺される事件が毎日のように、新聞やニュースで報道されている。こんな世の中でいいのか。僕は、間違っていると思う。世間や人々に流されて、自分を見失い、何か大切なものを忘れている人が、たくさんいるのではないか。僕は、雨音薫のように、毎日を大切に、そして、一生懸命に生きて欲しい。そして、僕たちは、生きたくても生きられなかった人々の分まで生きるべきだと思う。雨音薫は、短い生涯の中で、そんなことを教えてくれた気がする。